

風車

紀州の歴史と文化の風

埋蔵文化財と文化財建造物の情報誌

文化財センター季刊情報誌

【かざぐるま】

2009冬号

49

財団法人 和歌山県文化財センター

特集

向陽中・高等学校体育館建設に伴う
「秋月遺跡の発掘調査」

連載

文化財建造物課 短信

きのくに歴史小話

「建築彫刻の話」

「発掘屋余話」

考古学の散歩道

「紀ノ川流域の古代寺院」

向陽中・高等学校体育館建設に伴う

秋月遺跡の発掘調査

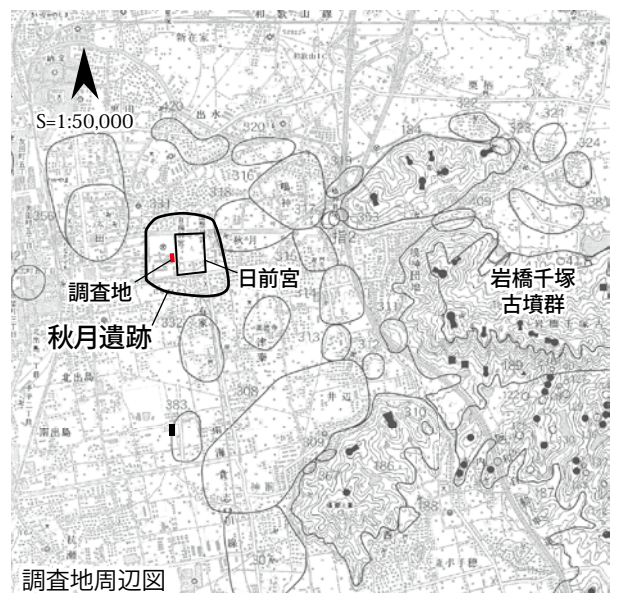
秋月遺跡は紀伊一宮とされる日前宮を中心(あきづき)に広がる遺跡で、古墳時代や古代(いちぜんぐう)の中世の日前宮に関わる遺構が注目されています。これまで日前宮の東側の日進中学校内を中心に和歌山市関係九次、西側の向陽中・高等学校内を中心に県関係八次の発掘調査が行なわれ、和歌山の中枢の地の歴史が解明されてきました。

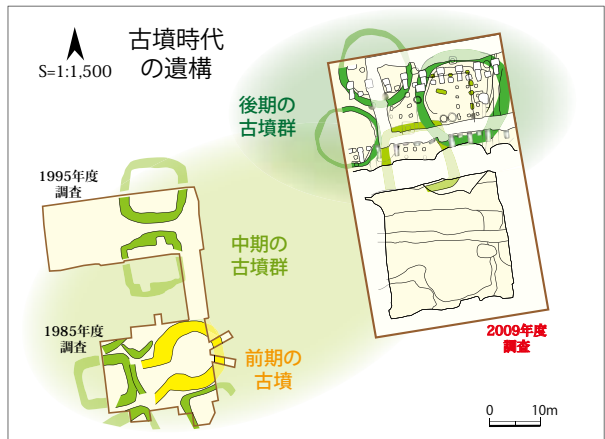
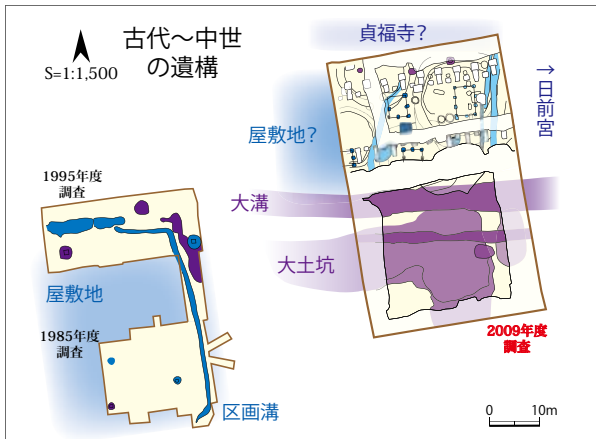
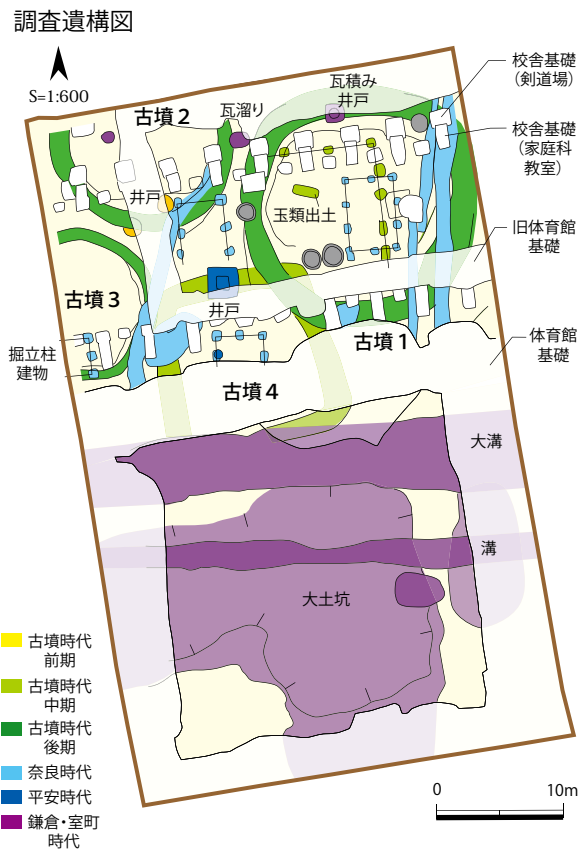
今回は体育館建設にともない、平成二一年六月から十月にかけて一六九六㎡の発掘調査を行いました。調査では古墳時代、奈良時代、平安時代末の鎌倉時代、室町時代の各時代にわたる遺構・遺物が見つかりました。

古墳時代は、中期の方墳一基と、後期の円墳三基があります。周溝からは多くの土器が出土し、付近から古墳に關係するとみられる玉類が見つかりました。これまでの調査を合計すると、古墳時代前期から後期までの古墳十二

基となり、調周辺に広がるようです。同時期には秋月遺跡の約1km東に位置する岩橋千塚古墳群で、丘陵上に数多くの古墳が築かれます。なぜ岩橋千塚古墳群に隣接する秋月遺跡では平地に古墳群が築かれたか、という点は埋葬者の系譜の違いなどが挙げられますが、当時の複雑な社会を示しています。

奈良時代には、秋月遺跡の北西に隣接する太田・黒田遺跡が名草郡衙(なぐさぐんが)(古代の役所)と推定されています。今回の調査区では、掘立柱建物四棟が見つかり、都城を中心(あんもん)に流行した「暗文」という器の表面を磨いて描いた放射状の模様のある土器が多数出土しました。平安時代後期になると、日前宮の東と西に神宮寺(じんぐうじ)、貞福寺(ていふくじ)という二つの寺院が存在し、それぞれ国懸神宮、日前神宮の本地仏を安置したようです。今回の調査区では、貞福寺の伽藍(がらん)に直接関わる遺構は見つかりませんで







古墳1の周溝北西側 土器出土状況



古墳1の周溝北東側 土器出土状況

したが、古代から中世の瓦が大量に出
 土し、貞福寺に関連すると考えられま
 す。室町時代には瓦積みの井戸があり
 ます。同時期には石積みの井戸が多く
 大変珍しい形態です。調査区の南側で
 は、東西方向の大溝と性格不明の大土
 坑があります。大溝は日前宮の東側の
 調査でも延長が見えられており、大規
 模な堀や用水路などの可能性がありま
 す。

中世後期には惣国自治が発展し、秋
 月郷神宮寺が惣国会所とされ惣国の中
 核の一つとなります。雑賀惣国の本拠
 である太田城は羽柴秀吉による水攻め
 で壊滅したことで有名ですが、水攻め
 の方法や土堤の詳細は明らかになっ
 ていません。今回の調査地は太田城の南
 東で水攻めの範囲に入る可能性もあり
 ましたが、その痕跡は見つかりません
 でした。

明治三七年には海草農林学校が開校
 し、大正四年にはその跡地に海草中学
 校が開校して現向陽中・高等学校の前
 身となりました。

(富永 里菜)



平安時代末の井戸



平安時代末の土師小皿出土状況

金剛三昧院客殿及び台所

平成二十年一月に始まった修理工事も丸二年が経過し、三度目の冬を迎えました。今年は、客殿部分で柱など軸組の修理に続いて床組や床板の組立を行い、同時に床組の補強や床下地盤面の叩き締めなどを行いました。その他にも、表具、建具の修理や、来年度より行う屋根葺き替えに備えて松皮を調達するなど、内容も多岐に及びました。現在は、客殿と並び建つ台所部分で建物軸組の建て起こしや柱足元の修理、床組の組立を進めています。

客殿では、敷居・鴨居や長押などの造作材の調整も進め、「上々段」の付書院を組み立て、さらに室内と「広縁」と称する廊下部分との境へ舞良戸という建具を建て込みました。この段階の客殿西面は、中古の改変で付加された部材の組立前の状況であり、ほぼ建築当初の形式と言えます(写真1)。開放的であった「広縁」は、寒さの厳しい高野山の気候も影響して



写真1：客殿西面の修理状況
(「広縁」奥が「上々段」。外周柱筋での中古建具の組立前の状況は、当初形式に近い姿を示している。)



写真2：台所の1室「寺務所」での解体及び修理状況
(漆喰壁の解体範囲は、柱の建て起こしや金具補強のために必要となった部分。)

か、建立後しばらくすると写真左手の建物外周柱筋に障子が建て込まれ、縁板の上には畳が敷かれて、「迫り座敷」と称した室内空間へと変わっていきま

す。また、「寺務所」と呼ぶ台所南側の一室は、雨漏りによる天井板の傷み具合がひどく、また、柱の傾きによる部屋上方の小屋根材の損傷も生じていたことから、天井組の解体にも着手しま

した。その結果、天井を構成する部材や長押などの造作材に、建立当初から別の建物の部材が使われていることがわかりました。状況から見ても、これらの部材は前身建物からの転用ではないかと考えています。今回の修理では、軸組や小屋組の修理に合わせて、軸組材と小屋組材とを金具で引き付けて補強するなど、建物の安定も図っています(写真2)。

(下津健太郎)

紀ノ川流域の古代寺院 — 鴟尾の話 —

富加見 泰彦

鴟尾^{しび}というのは、瓦葺き屋根の大棟の両端に取り付けられる飾りの一種です。寺院・仏殿などによく用いられています。中国では後漢以降に大棟の両端を強く反り上げる建築様式が流行し、やがてこれが変化して3世紀～5世紀ころに鴟尾^{しやち}になったと考えられています。唐代の末には、鴟尾は魚の形、鯨^{しやち}（海に住み、よく雨を降らすインドの空想の魚）の形へと変化しました。わが国では東大寺大仏殿の金色の鴟尾や時代は下りますが名古屋城^{しやちほこ}の鯨鋒が有名です。

紀伊では、知る限りでは佐野廃寺、西国分廃寺、最上廃寺、北山廃寺、上野廃寺などで見つかっています。その中で特徴的なのが最上廃寺から出土したと伝えられる鴟尾片です。

最上廃寺からは、径25cmの大型の軒丸瓦が発見されています。この瓦は江戸時代の儒学者仁井田好古^{にいだこうこ}によって編纂された『紀伊続風土記』にも登場します。30年余り前の話ですが、この瓦が地元の旧家に大切に保管されていると聞き、お訪ねしたところ、偶然、最上廃寺で出土した鴟尾片を見ることができました。最上廃寺・北山廃寺で葺かれている坂田寺系の「単弁八葉蓮華紋」と同範^{どうはん}と思われる蓮華紋が鴟尾の縦帯と思われる部分にスタンプされています。鴟尾の縦帯に蓮華紋をあしらう例は全国的に見ても珍しく、わずかに香川県大川郡寒川町石井廃寺、大阪市四天王寺例があるのみです。もちろん紀伊では、最上廃寺以外での出土は今のところありません。四天王寺例は複弁の蓮華紋が12個貼り付けられています。最上廃寺のものも同様な状況であったと考えています。

最上廃寺・北山廃寺・西国分廃寺はともに坂田寺系の瓦を持ち、四天王寺式の伽藍^{がらん}配置と考えているので、北山廃寺でも同じような鴟尾がでないかなと密かに今年の調査に期待しています。

(続く)

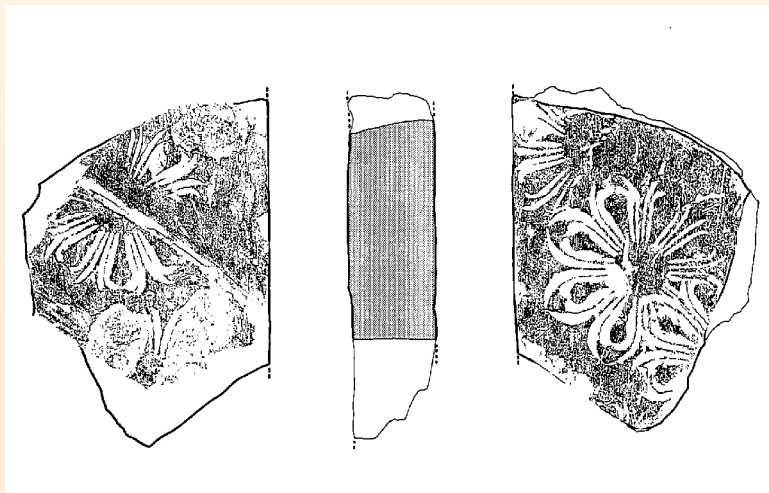


図1 最上廃寺鴟尾図

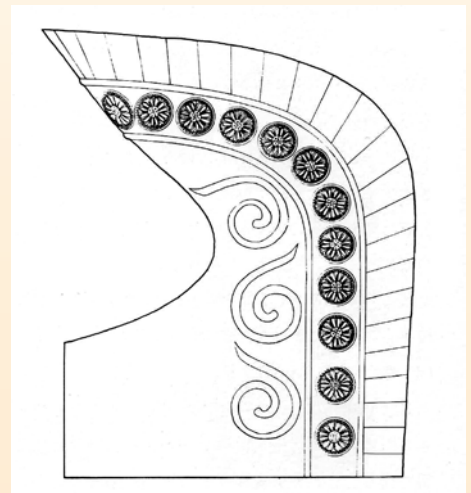


図2 四天王寺鴟尾図

建築彫刻の話 ⑦

紀の川市桃山町にある三船神社本殿（一五九〇年建立）の「墓股」彫刻を紹介いたします。三人の人物が彫刻されています。真ん中の人物は小さいので子供でしょうか。右側の手を繋いでいるのはお母さん、左側はお父さんでしょうか。画面の中央には釜とその下に鍬らしいものが転がっています。奇妙な組み合わせのこの彫刻はどんな場面だと思いますか。

これは中国の二十四人の親孝行物語、「二十四孝」の一つで「郭巨得釜」という物語の一場面です。「郭巨が釜を手に入れた話」なのです。「郭巨」は左側のお父さんの名前で主人公です。右はその妻と子供です。郭巨は、年老いた母と、妻、子供の四人暮らしでした。でも毎日の食事にも事欠くほどとても貧しかったのです。年老いた母を養うために、郭巨は我が子を犠牲にしようと思ひ裏山へ連れ出し、穴を掘って埋めようとしたところ、「天の神」が親思いの気持ちに感銘し、またわが子を思う郭巨の心中を察して、「金の釜」を掘り出させた、という場面です。思いがけず金の釜を手にした郭巨一家はその後幸せに暮らした、という話です。



三船神社本殿の墓股彫刻「郭巨得釜」

親を養うために我が子を手にかけることが親孝行とは、現代社会では到底受け入れられる話ではないのですが、このような説話を彫刻の主題に取り上げた四百年ほど前の戦国時代の人々はどのような社会の中で暮らしていたのでしょうか。建築彫刻を見てそんなことに想いを馳せてみたいものです。（鳴海 祥博）

発掘屋余話 ⑦

太閤意識

今年のNHKの大河ドラマは、上杉臣下の武将・直江兼統の生涯を描いた「天地人」だった。その兼統の事績のひとつに「直江石堤」と呼ばれる治水事業がある。米沢城下を流れる最上川に施した立派な石積みの堤防である。

石積みの堤防というと、昔からどこにでもあるような気がするが、実はそうではない。中世まで遡る、来歴のはっきりした堤防はほとんどないと言っている。ごく稀に、発掘調査で見つけることがある。こうしたことから堤防を考古学の対象とし、研究していこうという気運が、この十数年前から盛り上がり、「堤防考古学」なる言葉も定着しつつある。

そうした中、先年（平成十九年）、京都府の宇治市で大規模な石積み堤防が見つかった。調査の結果、一五九四年（文禄三年）に豊臣秀吉が伏見城の築城に際し、宇治川に築いた総延長十二kmの大堤防、太閤堤と呼ばれるものの一部であることが判明した。太閤（秀吉）の名前が冠されているせいか全国的な話題になり、今年七月には国指定史跡にもなっている。

しかしながら、和歌山においてもこれに勝るとも劣らない立派な堤防が見つかっている。紀の川の北岸、かつらぎ町の窪・萩原遺跡で平成八年の発掘調査で確認された。構造は、太閤堤にきわめてよく似ており、时期的にもほぼ同じ頃と考えられるもので、兄弟堤と言っている。いや、和歌山の堤防の方が、より精緻で技術的にも優れていると思う。それが方や国指定史跡……太閤の名の為せるわざかと、調査担当者としては太閤堤の名を聞くたびに僻み、思わず肩に力が入ってしまう。

こういうのをきくとタイコ意識と言うのだろうか。（村田 弘）



催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報

(財)和歌山県文化財センター <http://www.wabunse.or.jp/>

○「北山廃寺・北山三嶋遺跡発掘調査報告会」

日 時：平成22年3月6日(土)午後2時00分～午後4時00分

場 所：紀の川市貴志生涯学習センター 講義室1

県立紀伊風土記の丘 <http://www.kiifudoki.wakayama-c.ed.jp/>

○企画展「古い道具からくらしを調べよう」

期 間：平成22年1月19日(火)～3月22日(祝・月)

和歌山県立博物館 <http://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp/>

○企画展「きのくにのやきもの」

期 間：平成22年1月9日(土)～2月28日(日)

○企画展「新発見・新指定の文化財」

期 間：平成22年3月6日(日)～4月18日(日)

和歌山市立博物館 <http://www.wakayama-city-museum.com/>

○特別陳列「歴史を語る道具たち」

期 間：平成22年1月13日(水)～2月28日(日)

現場事務所一覧

金剛三昧院保存修理事務所

高野町高野山 425

TEL：0736(56)5578

北山廃寺・北山三嶋遺跡発掘調査事務所

TEL：0736(64)8052

粉河寺遺跡発掘調査事務所

TEL：0736(74)3501

神前遺跡発掘調査事務所

TEL：073(471)7709

坂田遺跡発掘調査事務所

TEL：073(471)2126

埋蔵文化財課分室

和歌山市新在家 61 番地-4

TEL：073(472)3710

8	催し物案内
7	きのくに歴史小話 「建築彫刻の話」 「発掘屋余話」
6	「紀ノ川流域の古代寺院」
5	文化財建造物課 短信 連載コラム 考古学の散歩道
2	「秋月遺跡の発掘調査」
1	表紙 秋月遺跡 特集 向陽中・高等学校体育館建設に伴う

風車 49 (2009冬号)

平成22年1月15日発行

(財)和歌山県文化財センター

〒640-8404

和歌山市湊571-1

TEL:073-433-3843

FAX:073-425-4595

E-mail: maizou-1@wabunse.or.jp

URL <http://www.wabunse.or.jp>